〈研究ノート〉

「沖縄県史」の戦争体験記録を編集する意義

仲　地　哲　夫

まえがき

本土の各県で「県史」の編集が盛んに行われてきた。沖縄でも1960代の前半に『沖縄県史』全24巻の編集を計画した。他府県の「県史」と異なって、奈良時代・平安時代…江戸時代・明治時代というふうに古代から近代までを時代順に編集するのではなく、1870代（「琉球処分期」）から始まって沖縄戦（日本の敗戦・米軍の占領支配）までに時代を限定し、全24巻の中に「戦争編」３巻（住民の戦争体験記録２巻）が含まれていることが特徴の一つである。「戦争編」は1965年前後に始まったが、当時の沖縄には専門家（沖縄戦研究者）が皆無にちかかった。大学が創立して日が浅く、近代史の研究者が育っていなかった。「県史」の編集も暗中模索の状態であったから、私が暫定的に「戦争編」を担当して、資料編第11巻･14巻の編集と兼務することになった。そして沖縄県史編集審議会に「編集の意義」（「戦争（記録）編を編集する意義」（序文の次に全文を紹介する）を提出することになっていた。

個人的な事情であるが、２年前に宜野湾市から中城村に転居した。図書、資料のコピー、ノートなどを整理していると、40余年ぶりに段ボールの底から20代後半に書いた原稿が出てきて、第１回の審議会の様子が昨日のことのように思い出された。琉球政府のＢ５判の罫紙に縦書き６枚余に原稿をまとめ、赤ペンで数行も削除したり、熟語を訂正するなど悪戦苦闘して何度も推敲したことが分かる。もう少し書き加えてそれを結論にしようと思っていたが、かえって冗漫になり蛇足になるからと、そのままにしておいた。その悪筆の原稿を同僚の安仁屋（旧姓照屋）以都子さんが清書（ガリ版刷り）をして読みやすくしてくれたのである。

個人的なことを細かく書いたのは、「戦争編」のスタートの頃の事情を正確に知ってほしかったことと、戦争体験を記録するのは重要な課題であるが、準備不足であったことを正直に書いておきたかったからである。

一、序文

私は2，3年前に久茂地の琉球新報ホールで「1965年前後の『沖縄県史』・『那覇市史』の編集事業をめぐって―『県史』の資（史）料の収集と編集過程を中心に―」という題で簡単に報告した。当時、「沖縄歴史研究会」・「おもろ研究会」・「『球陽』研究会」が、それぞれのかたちで根気よく研究活動を持続していたのは，沖縄における学問文化の伝統を継承

する重要な意味があったと私は考えている。沖縄の学問研究は、明治以来、「官学アカデミズム」（大学その他の保守的権威主義的な学術研究）とはおよそ無縁の、民間の学問がほそぼそとつづけられていた。1965年前後の前記の沖縄研究に権威主義的な傾向がほとんどなかったのは、それと関係があると思っている。

話はかわるけれど、1965年頃に『沖縄県史』の資料編が相次いで発行された。それより前に、63年頃に名嘉正八郎さんが米沢（よねざわ）まで出かけて、上杉家の史料室で36枚撮りのフィルムを用いて写した「沖縄県日誌」と「上杉県令沖縄県巡回日誌」を、新任ほやほやの私が、『沖縄県史』第11巻（資料編第１巻）の編集担当になって、引きのばしたものを慎重につなぎ合わせて編集した。正確を期するために、たとえば「明治13年〇月〇日は何曜日ですか」などと、気象台に問い合わせたりしたこともあった。金城正篤さんが京都大学の大学院に在学中であったから、夏休みの折などには編集を手伝ったり、前述の「上杉県令沖縄県巡回日誌」の解題を書いてくれたりして大いに助かった。当時の沖縄の印刷所には使用に耐えない活字が多く、３校の時も４校になっても「不良活字」を差し替えなくてはならず、予想以上に苦労した。初校と再校の時に、通常は原文と照合して、句読点や段落に気を配りさえすれば、それですむものだが、その作業の外に１頁毎に10数本の「不良活字」を差し替えなくてはならなかったから、私たちも印刷所に詰めて、文選工の方々と連絡を取りながら暗くなるまでこの作業を続けて、ようやく出版に漕ぎ着けた。716頁の本であるが、最初に出版された『沖縄県史』なので、特別の愛着がある。

同年６月には２冊目の第14巻資料編雑纂１を発行した。この中には「明治６年大蔵省調、琉球藩雑記」・「琉球紀行」・「沖縄県旧慣間切内法」・「一木書記官取調書」など、東京を中心に，収集してきた貴重な資料が収録されている。この資料編雑纂１も600頁をこえるので、初年度に２冊も出版するのにかなり無理をしたのも事実である。主任の名嘉氏は「無から有を生ず」とか「目にモノを見せなくては…」を口癖にして張り切っていたが、実際に編集していた私たちは疲れ切っていた。編集作業と資料調査と校正が一緒くたになっていたことから、働き蜂のように働きづめだったからである。67年までに資料編第12巻・第13巻の「沖縄県関係各省公文書」を出版し、「新聞集成」も政治経済編・教育編・社会文化編の編集を進め、そのなかの一部は発行した。

その間に、那覇市内の中学校から金城功さんが県史編集室に移って来た。東京から帰って来た安仁屋政昭さんも加わったので、理論的にも実務的にもパワーアップした。今にして思えば、無理な計画を立て、しゃかりきになって働いたもんだと思う。正直にいえば、あの頃はよくがんばったという誇りはほとんどなく、ストレスを解消するために「サクラザカ」のおでん屋で、談論風発というよりも、とにかく狭い座敷でよく歌い大いに騒いでいた。「我が青春に悔いあり」と言いたくなるような複雑な心境である。

「新聞集成」は1898（明治31）年からの『琉球新報』と1918（大正７）年までの『沖縄毎日新聞』から基準に基づいて記事を選択し、筆耕してもらって印刷所に渡したのだが、この古い仕事の進め方は、能率の悪い作業の見本のようにも思えるかも知れないが、当時

はそれが最も確実な方法だったと思っている。安仁屋さんと私がペアになって、記事を選択するにあたっての基準を定め、紙面を見ておよそ30秒程度で記事を選択し採用したのだが、両新聞の総頁は少なくとも３万頁はこえるだろうから、１時間で180頁、１日にこの作業に約５時間集中すれば、900頁になる。正味33日もかかる計算になるが、土曜日・日曜日・休日もあるし、編集委員会などの会議もあった。何となく立ち寄る来客も多かったから、このスピードで頑張ってたとしても、３ヶ月はかかった。

選択し採用された記事は、当時の琉球大学史学科・地理学科の２年生か３年生であった女子学生たちが筆耕してくれた。アルバイトで１字１字筆写していくことを筆耕というが、東恩納文庫で長期にわたってこの一連の作業が続けられた。私はどこかのおじさんみたいな服装でスリッパをはいていたが、ときには読みにくい漢字を教えたり、困っているときは手伝ったり指示したりすることもあったので「素性の知れない妙なおじさん」と感じていたかも知れない。とにかく学生たちのあの頑張りがなければ、新聞集成の編集はスムーズに進捗しなかっただろうと、いまさらながら深く感謝している。

『沖縄県史』にくらべると『那覇市史』は薩摩藩の琉球侵略から現在まで目配りしていた。閲覧することが困難だった当時にあっては、研究者にとって手元に置いて研究することが可能になっただけでもありがたかった。難点は史料に系統性がないのが少し気になったが、1970年頃の沖縄の研究状況を考えると、やむを得ない選択であったともいえる。編集の対象となる資史料の時代の範囲が広く、選択についても考え方も柔軟で自由であった。初代の室長外間政彰氏の個性によるところが大きかったと思われるが、重要な史料を数多く編集発行して歴史研究の発展に寄与した功績を忘れてはならない。1970年６月20日に発行した資料編第１巻２（Ｂ５判539頁）は、薩摩藩の琉球支配を研究するには欠くことの出来ない貴重な史料が収録されている。図書館や所蔵者のお宅まで出かけて行かなくても、容易に利用することかできるようになった。稲村賢敷先生・比嘉春潮先生らのご尽力のたまものであり、那覇市史編集室の柔軟な考え方によって発行されたものである。

二、第一回県史編集審議会

［1967年１月中旬（19日の午後１時に開催し、４時30分に終了。引き続き小委員会を開催したと思われる。しかし、確証はないので、当時の記録によって確認する必要がある。）第一回編集審議会については、さいわいにも審議会記録がそのまま残っているが、小稿では原則として訂正加筆などはせずに、全文をそのまま紹介することにした。単純な誤記脱字は訂正し、必要に応じて［　］内に注釈をつけ、また「二〇数万の県民が戦傷死した」というような場合は、二〇の二の上にママをつけて、その数字が誤っていることを示した。］

１、戦争（記録）編を編集する意義

憲法改正の動きが顕著となるとともに論壇にも「大東亜戦争肯定論」が現われ、戦後日本国民の間に確立された戦争反対の立場がなしくずしに弱められつつある。このような風潮の中で、沖縄県史全24巻の中に戦争編３巻をおいたということは、廃藩置県から沖縄戦

終結に至るまでの県政史に占める沖縄戦の歴史的意義を現在の時点で解明せんとする強い意欲の現れであり、悪夢のような激戦場での体験を今こそ記録にとどめておかねばならないという決意の表明でもある。

沖縄戦は日本の侵略戦争のどたん場における激戦であり、沖縄県政の終幕としての性格をもつ。そしてその終結は戦後史の出発点でもある。つまり県政時代と戦後史との結節点として重要な意義を秘めている。

戦争編を編集する全過程が沖縄戦の歴史的意義を解明するための努力の過程に他ならないのであるが、激戦場における個々人の体験をありのままに記録することが同時に沖縄戦の歴史的意義を深くえぐり出すための典拠を生み出すことでなくてはならない。

世界にも類例のない激戦場での体験を強いられた人間として、償うことのできない体験を通じて、戦争の残虐性を告発する責任があり、戦争の実相を証言する義務がある。

それらの体験を正確に再現することによって、戦前（県政時代）から戦後（米国統治時代）にかけての歴史の結節点を明確にせねばならない。

２、歴史的意義の解明

太平洋戦争終えんの地としてすべての県民が激戦場に巻き込まれ、二（ママ）〇数万の県民が戦傷死したという歴史事実のもつ意味を解明せねばならないのであるが、沖縄戦を浮き彫りにするために太平洋戦争の一環として、沖縄戦の歴史的背景との関連で、その本質につらなる体験をどの程度の正確さをもって記録にとどめ得るかということがまず問題であり、戦争編を編集する全過程がそれを可能にするための努力の過程でなくてはならない。

個々人の体験記録といっても３ヶ月間の生死の境界におけるすべての事実の集積ではなく、あらゆる事実の中であの激戦場を抽象し再現するに足る重要な事実を選択し、それを克明に記録したものでなければならない。

激戦の全般的様相を視野において、極限状況における人間の恐怖・悲嘆・慟哭・苦痛・飢餓・憎悪など、非人道的な戦争の残虐性をするどくえぐり出せるような事実に焦点を合わせ、沖縄戦という歴史の禍根をあますところなく把握できるよう努力したいものである。

ここでは物量作戦によって壊滅し廃墟と化す激戦の過程における人間それ自身の地獄絵図を当時その阿修羅場にあった人々の記録によって再現せんとしているのである。［このような規模で沖縄戦の体験記録を編集する機会はおそらく二度とあるまい。］

ここで記録される事実の一つ一つがそれなりの重みをもって沖縄戦を解明するために欠くことの出来ない典拠ともなろう。現在の時点で沖縄戦をどのようにとらえたらいいのか。沖縄県民がひとしく体験したあの激戦場のあるがままをどの程度に再現できるか。世界史的観点からいっても回避することのできない現在の戦争と平和の問題をどのように考えたらいいのか、等々についても具体的指針を生み出す役割を担っているのである。

３、歴史的意義を解明するための視点

事実に即して個々人の体験をあるがままに記録するために、まず事実の選択にあたって

の視点を明確にしておかなくてはならない。既刊の沖縄戦記などに基づいて沖縄戦の歴史的意義を解明するための視点を据えることにする。

1、壊滅的打撃による焦土化の様相

米軍の物量作戦によって山河かたちを改める程の壊滅的打撃をうけた。沖縄県民が幾百年もの歳月をかけて築きあげて来た郷土のすべてが破壊され、焦土へと変貌をとげた。燃えさかる炎、飛び散る土塊の中に失われゆく郷土をみつめ、戦争のもつ破壊力を克明に描かなくてはならない。

2、二〇（ママ）数万の県民が戦傷死した事実

すべての県民が激戦の犠牲となり硝煙弾雨の中であえなく散って逝った。それら多くの肉親知友など同胞の屍を越えて生きのびて来た人間として、死者の最後の惨状を赤裸々に記録する義務がある。

3、極限状況における凄惨な体験

極限状況における人間の恐怖・悲嘆・苦痛・飢餓・憎悪など、非人道的な戦争のもたらした惨禍に遭遇することによって人間性がいかに蝕まれていったかを記録する。

4、日本の侵略戦争の末路［どたん場］であるということ

日本の侵略戦争の最後のあがきの中で何が行われたかを記録する。ひとつ一つの事実が軍国主義体制の中における思想および行動の崩壊過程を示しているのであって単なる個人的好悪の問題ではなく、沖縄県民に対する「差別意識」とからませて考えるべき問題でもない。

それはまさに日本の侵略主義戦争の末路［どたん場］、残虐な激戦場における人間性喪失という視点で記録されなくてはならない。

5、県政史と戦後史との結節点

挙国一致の戦時体制下にあってすべての県民は皇民（こうみん）として殉国の精神に徹すべく運命づけられた。しかし凄惨（せいさん）をきわめた阿修羅（あしゅら）場（激戦場）でのたうちながら死んでいく肉親や知友など同胞のむごい死にざまを目撃した人々は、あれほどまでにたたきこまれれた国体観念の何たるかを屍をこえて考えなければならなかった。「護国の鬼」として散った一〇数万の同胞の死の意味するもの、殉国の精神が音をたてて崩れ去るの感ぜざるを得なかった。底知れぬ悲嘆・苦悩の果てに絶望と虚脱の波がおし寄せて来た。やがて終戦［敗戦］とともに不安と期待のいりまじった混乱の時期が訪れた。

戦禍のもたらしたかぎりない悲嘆・苦悩・絶望・虚脱などの重荷を背負って混乱の時期を生きねばならぬ人々の慟哭があった。それはまさに国体観念との決別であり、幾多の犠牲を背負う人々の沈痛の姿であった。そこには廃墟の中から再起せねばならない人々の厳粛な決意が秘められていた。

事実を記録することによって二つの時代の結節点を深くえぐり出さねばならない。

［第一回県史編集審議会に関する「審議梗概」は、公文書館に所蔵されている。「詳細はテープにあり」と書かれているが、たぶんテープは劣化して、音声を肉声で確認

することは難しいだろうから、県史編集室で記録された前記の「審議梗概」に基づくほかないはずだ。そう思ったので、小稿では、それを利用することにした。〕

審議梗概

豊平〇「強い意欲の現われである」とか「今こそ記録にとどめておかねばならない決意の表明でもある」とかいうのは歴史執筆の立場ではない。戦争の実相を記録する。実相にはもちろん残虐性もあるし、戦争否定のものもある。編集の態度としてはそうした意欲をもったりすることは執筆者にも示されんじゃないかな。

真栄田〇平和の立場から厭戦気分を出すとか反戦気分を出すとかいうことは…読んで反戦になる読んで厭戦になるならそれでいいんだが、あくまでも実証的に記録する。

豊平〇住民不在の歴史記録であってはならない。それを重点に住民の動きを記録する。それもあくまでも客観的に記録にしたい。

真栄田〇戦争の残虐を強調したい。そのために編集するんだということ。残虐の戦争を経験した沖縄にとって戦争ほど嫌なものはない。その戦争がどんなに残虐であったかを実証的に記録する。

責任とか義務とかいうことは編集の立場ではない。県史という立場から慎重に考えなくてはならない。

豊平〇この記録は歴史的意義を解明するという態度なのか。これは歴史編集の根本的な問題である。解明するという態度なのか実相を記録する態度なのかは県史編集の根本的な問題である。解明という立場にたって問題をとりあげたら通史でも大変な激論が出るだろう。

真栄田〇沖縄戦の裏にかくされて本質的に戦争を起したというような問題はとりあげんでもいいんじゃないかな。本質につらなっているかつらなっていないかは別にして体験は体験として記録した方がいい。もっと実証的な立場に帰一させる必要があるんじゃないか。現在の戦争と平和の問題は所与的であり運命的であり回避することはできないが、戦争に対する評論的な立場までも評論する必要があるだろうか。

宮城〇推移する時勢に自分も参加して記述する…歴史家そのもは推移した事実を興味をもってそれをそのまま書く。推移することに参加する意志をもって書くことが最新の歴史観から出てくることなのかどうか知りたい。

阿波根〇個人の編集ならある歴史観をもって書いてもいいが、県史としては最大限に客観的立場にたって書く。

真栄田〇保守的立場とか進歩的立場とかは抜きにしてできるだけ実証的にかきましょうや。

豊平〇ヒューマニズムの立場から執筆するという態度をとれば客観性をもつ。

阿波根〇殆んど同じようなことだが、日本の侵略戦争という言葉も適切かどうか。沖縄人も責任の一端を負わなければならないのであるが、まるで人ごとみたいに書かれてい

る。文章も実証的丁寧にしたほうがいい。

豊平〇阿修羅場の体験を再現するものであるというのを根本的な態度にして、あとは個条書に列挙したらどうか。苦悩、失望、残虐などのテーマを設定して、残虐の実相を記録する。

阿波根〇二つ時代の結節点というのをもう少しくわしく書いた方がいい。

豊平〇絶対に要求されるのは人間尊重のヒューマニズムの立場に立つということ。

山城〇これ（戦争編の編集要項）があればあれ（編集の意義）はいらないのではないか。

阿波根〇実相とか実証的とかを強調したい。

豊平〇首里高校の戦没学徒の遺書もある。それを入れたらいいと思う。

山城〇飛行機から落とされたビラ（私がもっている）はどうかな。（それを入れようとの話あり）

名嘉〇執筆者必携が必要という形になるが、意義はのせないでこの理由と目標と態度、それに留意点だけでいいか。（それでいいという意見が多い）

豊平〇執筆者の問題だが、特に文学をやっている宮城聡、嘉陽安男、船越義彰、大城立裕等に委嘱して、住民の動きをまとめてもらったらというか、生き残りの人たちに聞いたりして書いてもらう。人間不在のものを否定するために人間存在のものを記録してもらう。

――――　亀井勝一郎に傾倒する形で話がはずむ――――

山城〇川上親美という人が「ニューポリス」に書いてあるが、あれはよく書かれている。それから八重山から台湾への疎開船が途中でやられたことなども重要であろう。

宮城〇40枚という問題だが、これは根本的的な問題ではないか。

真栄田・阿波根〇40枚書けない人もいるので、40枚程度にしたらどうか。

山城〇八重山の記録は吉野こうぜん氏の書いたのがある。

阿波根〇戦争編通史執筆の場合、座談会に集まってきた人たちへの謝礼金は出せないかどうか。

安里〇この次の段階は執筆者をあつめて執筆をおねがいすることになりますか。

豊平〇この次はこの小委員会と執筆者との合同委員会にしたらいい。

おわり

４時30分終了。同席した課員　安里・名嘉・喜納・仲地

［二世代前の委員の方々が、真摯に「沖縄戦の住民の体験をどのように編集すべきか」について審議した。私には委員の方々の主張は、「的はずれではないだろうか」と思えたし、「現代史や戦争の問題は学問研究の対象にはならない」というように聞こえた。（「沖縄戦の裏にかくされて本質的に戦争を起したというような問題はとりあげんでもいいんじゃないかな」とか、「この記録は歴史的意義を解明するという態度なのか。これは歴史編集の根本的な問題である。解明するという態度なのか実相を記録する態度なのかは県史編集の根本

的な問題である。解明という立場にたって問題をとりあげたら通史でも大変な激論が出るだろう。」などという考え方に固執しているように感じた。私にもそれなりの異論があり、委員の学問観に疑問がある。「実相を記録する態度」「実証的な立場」「文章も実証的丁寧にしたほうがいい」などと「実証的」という考え方で一致しているようだが、「実証的な立場」と「解明する立場」は全く異なるのだろうか。「解明する立場」に「偏見」をもっていたのではなかろうか。「解明することなく歴史学は深化発展するだろうか」と思っていたが、主任をさしおいてしゃしゃり出るのもよくないだろうと黙っていたことだけは明記しておこう。現在の私の考えをここで率直に述べるのは適切ではないだろう。私が半世紀近く前に「編集の意義」「戦争（記録）編を編集する意義」を書いて第一回審議会」に提出したのは確かだが、これに対する審議会委員の方々に対する批判や歴史観などについては、小稿ではこれ以上深く立ち入るのはよして、機会があればその時に書くことにする。]

三、「復帰」前後の沖縄戦研究の展開

この半世紀近くの間に、沖縄の各地域の歴史(「地域史」と称している)の編集事業は、「県史」「那覇市史」から市町村史、それから字誌へと広がっていった。1970年代の後半に「宜野湾市史」・「浦添市史」の編集が始まって「市民参加型」を合言葉に、住民の有志や学生も加わって、「身近な歴史」「親しみのもてる歴史」として知られるようになった。沖縄戦の体験については、若い人々が積極的に聞き取り調査に加わって、文化運動として質的にも量的にもゆるぎない活動になった。

これをさらに発展させるために、私たちは、もう一度「原点」にもどって、1965年前後の政治的背景などについても考えながら、「戦争体験を語り継ぐ」ということの重要性についてじっくり考えようと語り合った。「古くて新しい問題」であるが、「沖縄問題」の核心をなす重要なテーマの一つであると確認したからである。

「復帰運動」や自治権拡大闘争が盛りあがって「島ぐるみの闘い」が続いていたが、それが必ずしも「反戦平和」の闘いになるには至っていなかった。政治闘争が沖縄戦、とくに住民の戦争体験とつながるには、別の角度から「沖縄問題」を深く広く考えなくてはならないという新たな要求が出てくる必然性があった。

四、1970年代後半以降の住民の戦争体験調査の事例

『那覇市史』資料篇第３巻７「市民の戦時・戦後体験記Ⅰ」（1981年３月発行）は、凡例によると①「沖縄戦と戦後復興の苦難にみちた市民の体験を、平和都市建設の原点として永久に忘れることのないように記録にとどめ、正しく後世に伝え、再び後世の市民がその進むべき道を誤ることがないようにとの願いをこめて刊行されたものである」②「本巻の体験記は、沖縄戦々没者33回忌にあたる1977（昭和52）年を期して…実施した平和祈念特別事業で、那覇市民の戦時・戦後体験記録委員会（代表池宮城秀意）に委託して収集したものである」「体験記の収集にあたっては、市民の自発的な立ち上がりによる記録運動とし

て行った。」③「時代的には、1931年の満州事変から… 1950年代を中心に1960年頃までとして、戦前・戦中・戦後の体験を連続してとらえられるように努力した」④「…地域的にも沖縄内［沖縄の内部］の体験だけとせず、日本本土、シベリア、中国、朝鮮、東南アジア、南洋諸島など各地での体験を収集した」と簡潔に述べている。幅広い「那覇市民の戦争体験記録」をめざしていたことは説得力がある。私は、この収集方針は1970年代の「沖縄の住民の戦争体験記録」についての共通認識であったと考えている。

［凡例はかなり長文なので、筆者の判断で本巻の基本方針をなす①から④までを抜粋することにした。一部は…印をつけて省略した部分もあるが、原則として加筆・訂正はせず、基本的には原文通りである。］那覇市ならではの底力と文化力に改めて敬意を表する。Ｂ５判で619頁もあるので完全に読み通すには根気がいるが、那覇市民の戦争体験を知るにはその労を惜しんではならないであろう。それは同時に沖縄戦における住民体験の全体像をとらえるにも欠くことのできない資料だからである。

なお、家譜資料については、当初は外間政彰氏が地道に収集していた。知る人ぞ知るという程度であった。研究者の間でも家譜に関する知識がほとんどなく、史料的価値を認めるひとが少なかった。私もその一人で、不勉強だったことを思い忸怩（じくじ）たるものがある。

1970年代の半ばに田名真之（だなまさゆき）さんが本格的に収集するようになって、次第にその意義を理解する研究者が多くなった。

史料としての価値を知るには、やはり食わず嫌いではいけないのであって、手にとってじっくり読まなくてはならない。10年も20年も年月が過ぎると、家譜の価値に気がつく。やがてそれが研究者の間で共通認識になり、歴史研究の史料として確固たる位置をしめるようになった。そして首里系、那覇・泊系、久米系として発行された。いまでは「那覇市史」が出版した家譜を熟読含味することによって、沖縄における近世史研究の深化が期待されている。遅ればせながら外間氏・田名氏等を中心とする那覇市史編集室の先見の明に敬意を表する次第である。

ここで本題にもどって、住民の戦争体験の調査と編集の進展について考えることにしよう。『宜野湾市史』資料編２「市民の戦争体験記録」（1982年11月発行）の編集委員会委員長知念清一先生の「市民の戦争体験記録－発刊に寄せて－」という文章がある。知念先生は、「第１回県史編集審議会」（第二章の「第１回県史編集審議会」の「審議梗概」参照）の委員の方々とほぼ同年代の方である。教育者として校長まで勤めたあと、宜野湾村長として米軍占領下の政治行政に貢献した経歴の持ち主であるが、県史編集審議会委員の方々と「戦争体験記録」の編集の姿勢が全く異なる。事情が違うので単純に比較するわけにはいかないが、僅か10数年間で考え方がこんなにも違うのは何故だろうかと考えずにはおれない。次に知念先生の文章の肝心な部分をそのまま引用しておく。

「本体験記は長期にわたって編集作業員が直接身を以って体験された方々にお会いして、その生々しい事実を聴取しありのままに取材したものであるが、中には語る人も聞く人も語るにしのびない聞くに堪えない体験が紙背にかくされていることを読者諸君は察知して

戴きたいのである。…かかるいまわしい戦争に国民を引きずり込んでいった軍国主義者や戦争指導者による欺瞞政策や無謀さによって、如何に国民が踊らされていたことか、教育によって人間性がゆがめられて行く中で、大宅壮一をして「犬死」と言う言辞さえ弄せしめたほど国民の生活を強制し馴致しあやまらしめ、…体験者の口からそれとなく語られていることを私たちは見のがしてはならない。

いずれにしても戦争はこの世に於ける最大の罪悪であり、軍事を以て事の解決をはからんとする軍国主義思想がこの世における最大の犯罪性を持つことを知らしめることが本体験記を刊行する主観的なねらいである。…戦争を知らない若い世代の眼に心にこの体験談がどのようにうつり感ぜられるであろうか。…もし今の若い世代がこの体験談を単に昔の戦争物語でも読む気持であるとすれば私は心底に恐ろしい空しさを感ぜざるを得ないのである。歴史の叙述は事実を忠実にありのまま記録すれば事足りるのであり、いささかも主観や願望をさしはさんではならないのであるが、書かれた歴史を理性の眼を通して読み、将来に対処して行くこともこれまた歴史の一使命でなければならない。」

［『宜野湾市史』の「市民の戦争体験］の聴取は、公民館に古老の方々に集まってもらって、約10脚のテーブルに体験者と聴取者は、互いに初対面であったが、90分程度の面談を続け、市内の各公民館で次々に多数の住民から聴取していった。編集委員が特定の体験者を訪ねて聴取したこともあったが、上記の方法で実施したほうが多かったであろう。私は嘉数の公民館で、知念委員長が分かり易い方言で住民体験を記録する目的と方法を丁寧に説明されるのを聞いて深く感動したのを、つい昨日のことのように思い出すことがある。同胞に対する熱心な話しぶりを忘れることができない］

なお、同書の編集後記によると、「（前略）1979年２月市史編集委員会の発足をうけ、1980年11月市史第２巻発行、第３巻専門部会は編集調査要項を設定し、…1980年１月中原区をかわきりに20行政区において単位老人クラブ・各郷友会・各関係団体・移民出稼者・今帰仁村・宮崎県東郷町などの協力のもとに調査を進めていったのである。…延べ56回、約300名の方々から聞きとり調査をしたのである」と記されている。

五、住民の戦争体験を語りつぎ記録運動を続けよう

「学問研究の成果の地域社会への還元」といっても、言うは易くそれを実現し持続するのは並大抵の苦労ではない。私は南島文化研究所の同僚（先輩・友人）たちが地域史（特に戦争体験の記録）に没頭する姿を約20年間も見続けてきた。

まず石原昌家さんの調査の成果を紹介しよう。石原さんはゼミの学生を指導して、『宜野湾市史』（1982年11月発行）では嘉数ともう一つの行政区で戦没者数の調査をした。同書の付録資料に「沖縄戦における宜野湾村民戦没者数」という数表がある。戦没者の平均は26.9パーセント。嘉数・佐真下・我如古・長田の４行政区は40パーセント後半の住民が死亡している。嘉数高台に日本軍の陣地があったからである。伊佐が９パーセント・普天間・新城など６行政区は死亡率は10パーセント前半にとどまっていて、米軍の進撃のコー

スによって死亡率に大きな差があったことが分かる。

実は、住民の戦争体験の全貌を明らかにし、沖縄戦の実相をもっと掘り下げて調査研究をしようと、60年代の後半頃から「沖縄戦を考える会」が会議をかさねて、戦没者数だけでなく、戦災状況を正確に調査する方法や、学生・青年らにも呼びかけて大規模に活動を続けることの重要性などについても話し合われていたという。中山良彦・田港朝昭・儀部景俊・安仁屋政昭・大城将保・石原昌家さんらが牽引車の役割を担って、腹蔵なく話し合い、調査の課題や方法が次第に確固たるものになっていったわけでる。石原ゼミについて補足すれば、「宜野湾市の住民体験」の調査は、一種のウォーミングアップであった。これが『浦添市史』第５巻（1984年３月発行）として、大きく花開き、その方法と成果が評価されるに至ったのである。

私は、『浦添市史』第５巻を読み、シタイヒャー（快哉を叫ぶという意味の方言）と心から喜んだ。学生をその気にさせ、膨大なエネルギーを住民の戦争体験の調査に集中させた石原さんの力量（指導力）に敬服したからである。浦添市では住民被災の全戸調査をなしとげて、村毎の被災状況を数量的に把握できるようになった。その余勢をかって『ぎのわん 字宜野湾郷友会誌』・波照間の『もうひとつの沖縄戦 マラリア地獄の波照間島』（1983年発行 ひるぎ社「沖縄文庫」）についても同様の全戸調査をしたことは広く知られている。石原ゼミの方法と成果は大学における研究と教育の発展に資するところが大きい。教員が一方的に研究を発表する場になりがちであるが、それが学生の興味と関心を引き出し、学問研究の奥深さに感動して自ら励むようになるなら、昔風の型であってもそれなりの意味はある。学生にとって興味がなく難しくて退屈な講義なら教師の独り相撲になってしまうから、学生の興味もなくなって教育研究から遠ざかっていくだけだ。教師は我が身を振り返ってえりを正さなくてはならない。長い目で見れば一期一会の縁だから真剣勝負の時期である。「聖職」と考えてもあながち間違ってはいない。

柄にもなく話が大学の研究と教育の在り方になったが、浦添の日本軍と米軍の激戦については、石原昌家さんが日米両軍の資料を用いて詳細に書いている。小稿では激戦の実相については、孫引きなどせずに、「戦災実態調査表」（浦添村全体）と、「宜野湾村の調査表」とを比較して、日米の戦闘に巻き込まれた住民の戦死率を見ておくことにする。

宜野湾村の戦死率の平均は26.9パーセントであったが、浦添村の戦死率の平均は44.6パーセントとかなり高い。宜野湾村で「嘉数・佐真下・我如古・長田の４行政区は40パーセント後半の住民が死亡している」と書いておいたが、浦添村の住民の戦災の実態はそれどころではない。最も戦死率の高い村は安波茶の64.1パーセントである。50パーセントをこえる村は仲間・宮城・経塚・前田・当山・大平の６カ村である。私は、講演や講義のさいにこの数字をあげて、「沖縄戦の特徴の一つは天皇の軍隊の兵士よりも、戦闘に巻き込まれて死亡した住民のほうが多かった」ことを強調してきた。

次に安仁屋政昭さんの渡嘉敷村史と北中城村史における集中力（むしろ「執念」というべきか）について、述べておきたい。私は何度もバスかタクシーに同乗する機会があった。

これぞというときの安仁屋さんの真剣な姿勢と根気強さに学ぶところが多く、学恩の深さに頭の下がるこの頃である。安仁屋さんは、安里源秀先生が南島文化研究所に期待していた熱い思いに報いなくてはならないと繰り返し強調していた。もうひとつは「地域との結びつきを強化し、地域と連携することによって、地域の住民から学ぶことが重要だ」と述べ、それは「強い信念」といっても過言ではないほどのものであった。東村史・宜野座村史・金武町史・豊見城村史・佐敷町史などでも、安仁屋さんらしい姿勢は同じであった。

趣味に夢中になる教員も少なくなかったのに、あくまでも「市井の民」に徹していたともいえる。もう一つ忘れてならないのは、オーラルヒストリー（ORAL HISTORY、語り伝えられる歴史）の可能性を追求し、放っておくと埋もれてしまう貴重な歴史を、ほりさげ掘り起こすことに重要な意味があることを確信していたことである。渡嘉敷村史の調査の成果は、「深い闇」から真実を見つけ出し、家永三郎先生の教科書裁判に貢献したことで知られている。政治家や官僚の付け焼き刃の饒舌で真実が隠蔽され、手の平を返すように嘘が罷り通っている軽薄な時代に迎合してはならない。

戦争体験を語りつぐ運動について考えるために、忘れてはならない研究者として吉浜忍さんをあげておこう。地域史の編集に10年も20年も尽力した研究者は少なくないが、吉浜さんは泊高校の女子バレーボールを全国優勝させた熱血漢である。一見すると体育系的な本格的な指導力がある。歴史の研究者がこんな離れ技をするのも珍しいことだが、吉浜さんは『与那原町史』『南風原町史』で、誰も試みたことさえない方法で両町史で各村の「戦争体験の調査記録」を編集発行して見せた。これまでこんな調査記録を経験したことのない高校教師・青年、少数ながら高校生もふくめて延べ130名も集めて戦争体験を編集発行して語りつぐ意義を訴えて、作業に取りかかった。よほど説得力があったのだろう。教師も青年も高校生もやる気十分でみごとに目的を達成した。工夫次第では不可能と思ったことでも実をむすぶことがあるのである。

吉浜さんは、それ以前に南風原の陸軍病院の壕の保存を訴え続け、ついに町指定の文化財に指定させた実績がある。安仁屋さんが定年退職して後任に選任され、沖縄国際大学の社会文化学科もますます活性化してきた。来年度から「沖縄戦」が新設科目として設置され、吉浜さんがその科目を担当することになったという。素晴らしい科目だ。これまでの実績をふまえて着実に静かに学生に語りてかけてほしい。「沖縄戦の住民体験」の膨大な資料をじっくり読むだけでも読み応えのある研究史が書けるだろう。

六、あとがき

私は、「沖縄県史」の戦争体験記録を編集する意義については、ノーコメントにするつもりであったが、一つだけコメントをしておこう。「県史編集室」が那覇市与儀の琉球政府立中央図書館にあった頃、戦前の新聞にM氏の国粋主義的な論調、難解な論文を読んだことがあった。数日後、図書館でM氏と偶然に会う機会があった時、「先生が戦前新聞にお書きなった論文を読みました」というと、M氏は「若い頃は元気があったからね。いまはもう

あんなには書けなくななったよ」とおっしゃった。戦争責任など、もうとっくの昔に忘れてしまったという後姿であった。前記「審議梗概」のM氏の発言「現在の戦争と平和の問題は所与的であり運命的であり回避することはできないが、戦争に対する評論的な立場までも評論する必要があるだろうか」という考え方は、沖縄戦を宿命的なものとみなしみずからの戦争責任を不問に付したいという気持ちの表われではなかろうか。